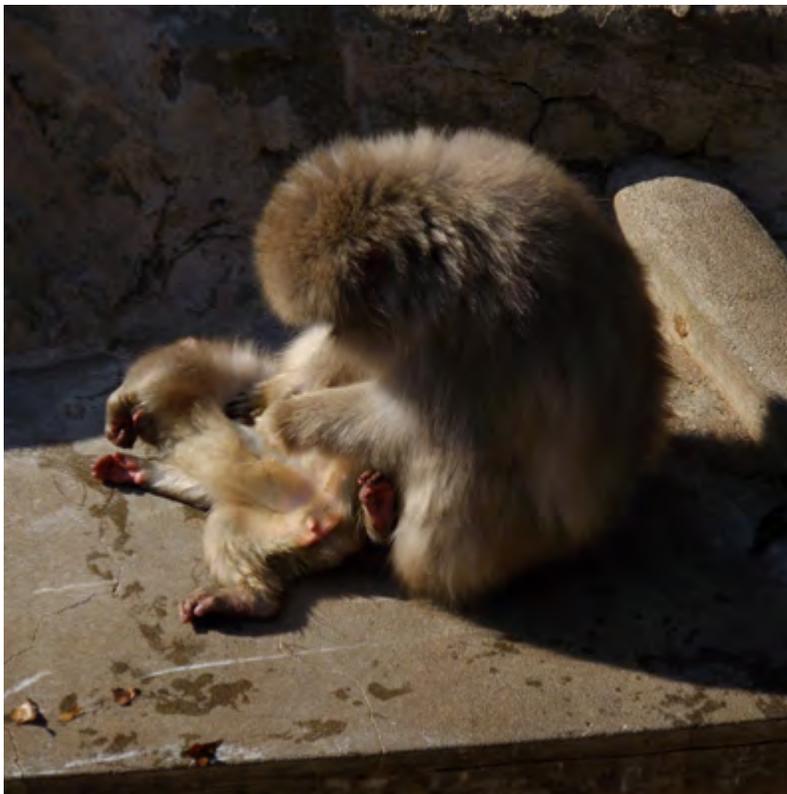


あを 1

2017



外燈に雪ほつてりとなほも降る 高島茂

この句、出典不明。外燈の句では
柏原和男釜ヶ崎にて刺殺さる

点滅する外燈風がつひに消す

外燈は雪の象にくれ点く

外燈に笠あるはよし雪積る

冬日 1963

冬日 1965

鯨座 1979

がある。即席でこの絵に書けと依頼され不確かな記憶の中で外
燈と雪のイメージで書かれたものかも知れない。絵は森慶文。Y

外燈に雪ほつてりとなほも降る

なほも

降る



茂

あを

一月



東京 佐藤 喜孝

初茜

ニッポニア・ニッポン日和初茜
きみもゐてわたしもゐます寶舟
柿吸うて若返ること拒みけり
寸前かも途中なのかも寒卵
地震津波憲法九条法隆寺

三重 長崎 桂子

数へ日

万両や葉影も紅に染まりつつ
落葉掃く晴れわたりゐて快き
あれは師走小学生で震度七
数へ日や甲高い声走り行く
数へ日の昼はうどんを今風に



東京 森 なほ子

囲まれて

二学期やあらかた消えし幼がほ
マネキンに見えてゐるなり秋の風
木犀の音立てて散るめうが畑
囲まれて写されてゐる秋の蝶
ヒラリりの如し真赤な唐辛子

東京 赤座 典子

初雪

住み馴れし街初雪に輝けり
日替りのコーヒーカップ冬に入る
着ぶくれて足取り傾ぐ石畳
小春 凧 二色で終る 変り玉
冬館遮断機ごっこの宴となる



埼玉 秋川 泉

闇の中で

ハロウィンにデビットボウイもマイケルも
石焼 諸売りに来る 爺待ち 遠し
ボブディラン色なき風の音にあり
龍泉の井戸で水汲む 一葉忌
御会式や闇より迫る 鉦太鼓

東京 石森 理和

五郎丸

一箱を一気に拵ぐ 蜜柑かな
スーパ一の広告拵ぐ 落花生
五郎丸ラグビー 一気に華やげり
これからは満腹は駄目 炬燵かな
極小の羽毛ふうわり 冬に入る



山梨 井上 石動

雜詠

黄落をぬけて不忍雨催
黄に紅に川流れゆく町に来ぬ
客声の古寺門前やつるし柿
霜晴や池面はちぢむ禽の首
珈琲を飲めば枯葉の音の中

愛知 王 岩

雜詠

旧友と洛北の春惜しみけり
古池や漣立ちし錦鯉
艶めくや睡余の佳麗牡丹花
伊良湖崎ロマン織りなす夏の海
長江の逆巻く涛や明け易し



埼玉
大日向幸江

秋刀魚

ビーンズのやうなマントでアルマジエロ
小春日の像の足首緩やかに
妃殿下の墓前に傳く冬帽子
一束の藁に雀の冬籠
古里は秋刀魚は干物で食べる物

千葉
黒澤 佳子

抱っこ

一分と抱っこをせがむ七五三
秋桜を見るたび意欲もらひをり
賑やかな鴉の声や柿熟るる
赤門を潜れば银杏並木かな
電燈を替へる息子や煤払ひ



雑詠

東京

佐藤 恭子

搔き暮れる六八九亡き後のこと
暮れ遅しケンケンパーのひびく路
暮れ早しみかんの残る屋台かな
当番は暖冬とやと寺の鐘
暮古月又も齢を重ぬなり

東京

七郎衛門吉保

奄美の旅

機に浸み帰り燕を見送れず
蛇穴に入ることもなく機を織る
泥染めの糸経緯に冬隣
奄美人心の柄の秋裕
長き夜の奄美六調こころうた



東京 篠田 純子

ピラカンサ

此処までが海だった石ピラカンサ
銀ヤンマ逆噴射して着陸す
木枯や運河の角に水脈あたる
菊を見て江戸六地藏万歩計
十二月の雪負けた石浦颯と立つ

石川 定梶じよう

霜柱

日が変る午前零時の天の川
声あげてわが身確かむ霧ぶすま
葉っぱ落ちつくしてから烏瓜
それ以来時計の遅れ神の留守
敷石の剥がれたところ霜柱



埼玉

須賀 敏子

診断

診断は様子見ませう石露の花
くまもんが案山子になって彩の国
紅葉谷鎖に縋る奥の院
猫車柚子満杯の香りして
冬晴るるあの人時に石頭

東京

田中 藤穂

神無月

神無月連れ添ふものに電子辞書
朝の紅茶甲斐駒ヶ岳は今朝雪降ると
老いの日々きりりと在らむ石露の花
雪が降る雷門の大提灯
人去りし石庭照らす冬の月



石川

中川句寿夫

神の留守

月のぼるとき猫じゃらし戯さるる
となり家の案山子軍服よく似あふ
一口の餡ころもちの秋収め
茹卵十二月は雨ばかり
神の留守爪を切るため指ぬくめ



前月抄

朝寒し切なげに鳴る冷蔵庫 佐藤喜孝

蓮の実が飛んで和服の父のこと 中川句寿夫

草紅葉大判の千代紙のこと 長崎桂子

弔ひの一日晴れたり初冠雪 森なほ子

銀杏の淡き鴝色点々と 赤座典子

闇の夜や耳そばだてて地虫鳴く 秋川 泉

ほころびの目につき出だす秋の暮 石森和子

あつらへの時雨享けたり洛も果て 井上石動



テレビでは見知らぬ町の秋を伝ふ
大日向幸江

足裏に秋の近きを悟るなり
黒澤佳子

橋の上ふと聞こえたる「唐黍」と
佐藤恭子

今落ちし団栗の肌唐三彩
七郎衛門吉保

遠くより戦ぐ花野の浮きて見ゆ
篠田純子

宵闇のアルヘイ棒がまだ回る
定梶じょう

さっぱりと一日だけの秋祭
須賀敏子

騒がしき世の明け暮れや茸煮る
田中藤穂

喜孝抄



十二月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

鐵棒は垂直に落つ秋の風

佐藤 喜孝

ビルの工事が終わると足場を解体する。パイプと板状の足場、又パイプと、上下の人が声をかけあって順序良く地上へ降ろすのだが、事故が起きてしまった。揚力を持ってない鐵の棒は垂直に落ちていく。秋の風が無常感を漂わせています。(純子)

松籟にまざる人声茸山

中川 句寿夫

父子相伝の茸の在処なのに、人の話声がするようです。颯と作者は自身の気配を消して、静かに時をやり過ごしています。(純子)

蓮の実が飛んで和服の父のこと

中川 句寿夫

一定梶じょうさんから十二月十六日、中川句寿夫さ

んの逝去の知らせを受けた。

句寿夫さんの最初の投稿の封筒には28・1・26の消印が押され、二十二日に書かれてゐる。弔電には、句寿夫俳句の愛読者であったことに添へ

水漬や門下と言ふもをがましい 句寿夫

酔海鼠に噓せ又ひとり酒 喜孝

と初投句の句寿夫さんの句に付けさせて頂いた。

蓮の実が飛ぶ晴れた日に亡き父を思ひおこす。思ひ出す父はいつも和服を着てゐる。わたしもなぜか父の夢を見た。この句を思っていたからであらうか。句寿夫さんはこの句の中では温かい日差しに包まれてをられる。わたしも同様であった。

ご冥福をお祈りします。(喜孝)

眼の術を終へ水彩画めく町を

長崎 桂子

目の手術を終えて眺めた町は、濡れて滲んだ淡い色合いの、まるで水彩画のようなのでしよう。新鮮な感覚に多少興奮気味の作者が見えてきます。(純子)

草紅葉大判の千代紙のこと

長崎 桂子

草紅葉を見て大判の千代紙のやうだと感じた。「千代紙のごと」でなく「千代紙のこと」と千代紙そのことに思ひが及んだ。一字違ひで広がりのある句にされてゐる。(喜孝)

秋日和ビル群を背に船溜り

森 なほ子

京浜急行の北品川駅から旧東海道を横切り、しばらく行くくと運河が現れます。運河沿いには船宿が連なり、釣船や屋形船が繫留された風情は時代が逆行したようです。高層ビルの玻璃に秋の日が跳ね返り、はっと現代に戻されます。(純子)

弔ひの一日晴れたり初冠雪

森 なほ子

弔ひのその日はよく晴れてゐた。遠くの山頂には今年初めて雪が降ったらしい。雨が降らうが晴れてゐやうが哀しみの気持ちに変はりがないのだが、なほ子さんの心は心に染みる景色であつた。(喜孝)

説明の方言難し林檎挽ぐ

赤座 典子

作者は林檎挽ぎに行つたのですが、説明の方言に苦勞なさつた様です。林檎園のシステムなのか、林檎の種類なのか。とりあえず挽ぐ作業にかかる作者が見えてきます。(純子)

闇の夜や耳そばだてて地虫なく

秋川 泉

地虫にも聴力の在ると言う句意と解釈しました。幼虫なれど、恋の準備でしょう。「ジージー」と雄が鳴くと「ギイツ」と雌が呼応する。やがて成虫に

なつた時の為に、恋の相手のあたりをつけているのでは？と想像してしまいました。(純子)

闇の夜や耳そばだてて地虫鳴く 秋川 泉

「闇」夜「地虫」と縁語がつづき言葉の力を消しあつてゐる。しかし地虫が耳を敬ててゐるといふことに興味を持った。常識では耳を敬ててゐるのは人間だとおもふが、地虫もさうだといふ。云われてみれば近づくと鳴き声が止んでゐることがある。そして歩を進めるとまた鳴き出す。おもしろい見方だ。(喜孝)

百匄柿重ね一枚携へる 石森 理和

百匄柿を見ると暖かく豊かな気持ちになります。「身体を冷やしてはいけないうよ」と母親の言いつけを、思い出す作者なのです。(純子)

あつらへの時雨享けたり洛も果て 井上石動

京都の中心部の明るさを離れ、洛外へと移動中の作者。「おあつらえ向きに時雨て来たわい。」享けたりの表現に、状況に対する余裕を感じました。(純子)

杉山の五合目あたり秋時雨 大日向幸江

杉山を作者が見ていると感じました。山の中腹辺りに雨雲がサーッとよぎります。杉の他の広葉樹が色づいていて、雨が過ぎると紅く濡れ光っています。(純子)

遠目にもカンナ連なる大農園 黒澤 佳子

相当に大きな農園なのでしょう。しかもぐるりとカンナを植えてあります。ハッキリとした花の色で敷地を区切っている農園主は、仕事もしっかりしている事と思いました。(純子)

橋の上ふと聞こえたる「唐黍」と 佐藤 恭子

子供の頃に聞いた食物の語彙は、本能的に脳に染み込んでいます。作者が耳にした「とうみぎ」が頭の中で派生して、とうもろこしに対する食欲と、えも言われぬ懐かしさに、気持ち支配されていきま
す。(純子)

橋の上ふと聞こえたる「唐黍」と 佐藤 恭子

昔々、妻がとうもろこしを「とうみぎ」と口をついて出た。違和感があったので笑ってしまった。平凡社版「大辞典」をひいたら「玉蜀黍の方言。宮城県北部・福島県・栃木県河内郡・群馬県館林町。」としっかりと載ってゐた。妻は幼少を福島の上春で過ごしたのでその折りの記憶であらう。失礼なことをした。近頃恭子さんは病を得て以後、句作を休ま
れてゐる。(喜孝)

今落ちし団栗の肌唐三彩

七郎衛門吉保

作者は根津美術館の団栗が、他の団栗とは違つていたとの事ですが、さもありません。五月に尾形光琳の燕子花図屏風を見に、根津美術館に行きましたが、財をどれだけ投げたらコレクション出来るのかと溜息ばかりでした。庭の樹木も吟味されて、唐三彩の肌の団栗は有り得ると思ひました。(純子)

今落ちし団栗の肌唐三彩

七郎衛門吉保

ネットで探したがそれらしい団栗がなかった。珍しい団栗のやうだ。団栗を陶器の唐三彩と見立てた。ストレートにさう感じたところが気持ちよい。日頃陶器に親しまれてゐるたまものであらう。(喜孝)

宵闇のアルヘイ棒がまだ回る

定梶じょう

その昔は外科医も兼ねていたと言ふ床屋さん。アルヘイ棒は、動脈、静脈、包帯の色を表しているとの事。作者はアルヘイ棒の明かりに安堵を覚えつつ、

月が出たら消えて欲しいと思っていらっしゃるので
しょうか。(純子)

遠くより戦ぐ花野の浮きて見ゆ

篠田純子

このやうな景に接したことが残念がない。いや
あつたのだらうがさう感じなかつた感覚の鈍さであ
らう。花野の美を感覚で捉えた句。

さつぱりと一日だけの秋祭

須賀敏子

前書きに所沢とあります。「芝のだから祭」の
ように半月がかりの祭もある中、所沢は合理的にコ
ンパクトに祭を開催していると思えました。経費を
かけず、運営する人に煩わしさを求めない意気込が
「さつぱりと」の一言に表現されています。でも作
者の待ち焦がれた楽しい祭なのです。(純子)

麗しき観音蔵し柿の村

田中藤穂

琵琶湖の北に、村人の守る観音さまが在るとい
うことは、聞いていました。鍵を開けて見せていた
いた観音様の美しさに触れた作者の感動と、素朴な
村人の純粹さが、柿の村と言う季語に凝縮され、蔵
しとの表現に観音の歴史や、村人の懐の深さをも感
じられました。(純子)

騒がしき世の明け暮れや茸煮る

田中藤穂

先月号で誤植をした。『世』を『夜』としてしまっ
たのだ。お詫びします。

古今世の中は騒がしいものとおもふが、気の持ち
やうで少しは紛れるか。そんな騒がしい世の中を斜
に見て、茸を煮る。何を煮ても様になるがこの句は
“茸煮る”で一句が収まった。(喜孝)

比来披見

ホトトギス 十二月号	日当れば枯野に動きをりしもの	稲畑 汀子
水の綺羅日の綺羅浮寝鴨の綺羅	沖 十二月号	稲畑廣太郎
実むらさき正座が常の父なりし	雨月 十二月号	能村 研三
胸中を貫くことも秋の風	槐 十二月号	大橋 暁
竹伐つて倒れるまでの一呼吸	馬酔木 十二月号	高橋 将夫
守りたきものある幸や式部の実	風土 十二月号	徳田千鶴子
山の秋風に瀬音に散り急ぐ	京鹿子 十二月号	南 うみを
芒野の入口へ息ととのへる	六花 十二月号	鈴鹿 呂仁
散り方が白山茶花とヤス子いふ	万象 十二月号	山田 六甲
秋晴れの万象中央句会なる	会場に月山よりの萩すすき	大坪 景章
春燈 十二月号	月代や幼児に手をあづけられ	内海 良太
鳴 十二月号	小春日のあなたはいつも祥月命日	安立 公彦
		井上 信子



変つたやうな麥らぬやうなと生身魂	末黒野 十一月号〈前号正誤〉	高橋 道子
半円の虹郷愁を湧き立たす	寄れば引き退れば寄する秋の波	小川 玉泉
未黒野 十二月号	月光へ八重の花閉ぢ醉芙蓉	松本三千夫
尼寺の一打一韻秋深み	瓔 冬号	小川 玉泉
駅前でバス待ち花野で水子待ち	雲の峰 十二月号	松本三千夫
膝折りて聞く小春日の堰の音	萱 十二月号	火箱 ひろ
かなかなを遠にくれゆく佛たち	園生道呼び戻したき秋の蝶	朝妻 力
体内に空間のあり柳散る	朝 終刊号	木村 嘉男
水中の手の美しや蕪洗ふ	還らざる日々よ久しく足袋履かず	亀田虎童子
湯気立ててをりぬ何かを忘れをりぬ	子へひらく双手は翼霜の花	小島 良子
こだま 十一月号	大切株曝しがらんと寒き空	岡本 眸
		松林 尚志

(喜孝)



秋川 泉

御会式や万灯行列異界めく
朝焼けやさざ波たちて秋の湖
荷をひろげ大獅子袖を売る男
駅頭に売る獅子袖に見とれをり
大きくさめ振り向く先に若き祢宜

御会式や万灯行列異界めく

「異界めく」は泉さんの実感。読み手にも伝わる実感。ただ、形の上で俳句らしさがあれば、と思います。「御会式や列の方灯異界めく」。

朝焼けやさざ波たちて秋の湖

上五に「朝焼けや」と置いて座五に「秋の湖」では、夏だと思つたのに秋だったのかい、ということになります。「秋の湖やさざ波たちて朝焼けす」。「朝焼け」は本来、夏だけの現象ではないわけですが、上五に据えることで随分重い置きようになるわけです。

駅頭に売る獅子袖に見とれをり

多分、鬼柚子の類いなんでしょうか、「獅子袖」。名前だけで大きさが見当つきます。ですから、売っているのは男であり、且つ「みとれて」いるわけです。ただ、「駅頭に」「獅子袖に」の重なりがほんの少し煩わしい。直せないなら仕方ないのですが、「駅頭や」と切るか、「駅頭にあきなふ獅子袖」のように、「に」を外す工夫も必要かと。

大きくさめ振り向く先に若き祢宜

「振り向く先」に説明臭。「振り向けば若き祢宜なり大きくさめ」。

大日向幸江

観客を見てるゴリラの息白く
霜月の余祿のような陽だまりに
地を這って足首に来る木枯一号
黄昏るるカレーの匂と秋刀魚の香
イケメンのキリンの角や花八つ手

観客を見てるゴリラの息白く

面白い。でも、「何でも文語を遣え」とは言いたくありませんが、「見てる」はやや雑。「観客を見てる」をゴリラ息白く。

霜月の余祿のやうな陽だまりに

中七「余祿のやうな」が優れて上手な措辞。ところが、一句中に休止するところがありません。なくともいい句は勿論ありますが、殆んどこの句はあつた方が落着きます。「陽だまりが余祿のような霜降月。

地を這って足首に来る木枯一号

結句を字余りにするのは、凡そ困難な方法です。あるいは、「足首」とまで言う必要はない、とも思っています。「木枯一号地を這って足もとに来る」。

イケメンのキリンの角や花八つ手

「イケメン」はいわば口語。幸江さんは口語遣いに足場を置いていらつしやるようです。そうでしたら「イケメンの」は学校文法でいう「同格のの」で文語風。この語は現代語では「で」に変わっていますので「イケメンでキリンに角や花八つ手」としたい。

七郎衛門吉保

傍らに秋の蠅居り爪を切る
いま流行一粒の塩今年米
口あけて鮮血したたるザク口かな
手を出してスーパームーン下支え

傍らに秋の蠅居り爪を切る

爪をきる。俳句にはいっぱい出てくる措辞ですけど、掲句はみごとに取り合わせ。飛翔しない蠅です

から「傍らに」がよく利いている。

冬めいて石白の面洗ふ昼

「石白の面」とあります。挽き白なのです。作業の終わった、殊に上下の歯の面を水洗いする。そのことが冬の昼だけに佳しくもある。

口あけて鮮血したたるザクロかな

「鮮血したたる」、リズムがいま一つ。「口あけて鮮血淋漓ザクロかな」。

手を出してスーパームーン下支え

重々しい満月。手を出して下支えをしたい、と。よく分りますが、そこまで言わなくてもいい。「もろ手差し出したきスーパームーンかな」

なお、外来語についてすこし付け加えさせて下さい。例えば「ボーイ」や「ガール」は日本語のリズムでは三音ですが、原語では一音。一拍の語なのです。「ボオイ」「ガアル」。ですから「スーパームーン」は、日本語では七音の語ですが、原語では「スウパームウン」で三音の語。けれども日本語で読めば「スウ

パームウン」として六音、「スウパームウン」と読んで五音にもできる。外来語はよく言えば自在、悪く言えば曖昧なのです。だから遣うことを嫌つては現代の句歌はつくれない。石動さんは「超満月」と訳しましたが、それも一つの方法。

因みに吉保さん「長足の進歩などあり得ない年」とハガキにお書きです。平成28年一月でしたか二月でしたか、へ雪少なく蓑脱ぎたさう地蔵様 吉保を私は没にしました。少雪で暖かいから蓑を脱ぎたそうである。当たり前は詩にならない。今の吉保さんならよく分る筈。やっぱり進歩しているのです。

田中藤穂

主婦若し落葉掃きある身のこなし
うそほんと十一月の雪予報
覚悟めく文へ返信冬の雨
落葉道まだ灯りある保育園
物差しに夫の祖母の名冬の月

主婦若し落葉掃きある身のこなし

上五「わかし」と結句「こなし」の音の重なりのないほうがいい。「主婦若く落葉掃きある身のこなし」。

うそほんと十一月の雪予報

句のことばとして「うそほんと」はいまひとつ、と思います。あるいは「雪予報」の措辞、字余りを嫌つてのことでしょうが、やはり窮屈。「ほんとかも十一月の予報が雪」。

落葉道まだ灯りある保育園

「落葉」を主にすべき。「保育園まだ灯りあて落葉かな」。

須賀敏子

帰り花今日も二合の米を磨ぐ
言ひ返す言葉はあれど林檎剥く
一回り若き友あて紅葉茶屋
峡の秋念仏講も途絶えけり
御点前は公民館の秋まつり

帰り花今日も二合の米を磨ぐ

「米を」と「磨ぐ」を連接するのは面白くない。「帰り花二合の米を今日も磨ぐ」。

一回り若き友あて紅葉茶屋

「若き友あて」が凡。「一回り友が若くて紅葉茶屋」

赤座典子

寒紅や画面の人の鼓打つ
臙脂色枯れて紫花水木
すっぽりと黄金の鎧冬柏
市役所に柿たわわなり十二月

臙脂色枯れて紫花水木

私の卒業した小学校の学校園に花水木がありました。白化でした。ですから臙脂色の花水木は知らないのです。枯れて紫色になるといふ。見てみたい、とも思う。

すっぱりと黄金の鍍冬栢

なるほど栢の葉は枯れても枝にあつて、あたかも黄金の鍍をつけているようだ、と。よく見て、よく感じたのです。

市役所に柿たわわなり十二月

市役所の庭だから面白い。

そういえば思ひ出したことがあります。「莓のたわわ」とあつた句が会に出されて、指導の先生が「莓に、たわわ、というだろうか」と呟いたのでした。若かつた私は、「柿たわわ」とはいうが莓には遣わないのでは、の意であろう、と案じたのでしたが、少したつて先生の本意が分りました。「たわわ」とは「撓わ」。多くの実がなつて木の枝のしなうさまを言う、と知つたのでした。「枝のたわわ」が正しい言いよう。でも、「柿が枝もたわわ」ではまどろっこしい。やっぱり「柿たわわ」「稲たわわ」「みかん撓わ」と俳句ではいいたいのです。

長崎桂子

大雨風草木の槌せる冷まじき
肌寒の力ト押す人息かけて
秋深む名物といふうどん食ぶ
立冬の朝日来る窓微笑まし

大雨風草木の槌せる冷まじき

草木の褪せる原因が大雨風である、とまで言う必要がありません。「いつべんに草木の褪せる冷まじき」。

肌寒の力ト押す人息かけて

句中に切れ、休止が欲しい。「肌寒し力ト押す人息かけて」。

秋深む名物といふうどん食ぶ

以前に一度書いたことかも知れません。としたらもう一度言わせて下さい。「秋深む」「春深む」等の「深む」。学校文法で「深む」は、深める、の意。ですから

鐘一打秩父の秋を深めたる

深見けん二

のみごとな句は正しく遣っているわけです。処が、多分昭和も戦後辺りから「秋深む」が「秋が深まる」の意で遣われるようになった。最近の国語辞書はほぼ、「深む」の語釈に「深む」「深める」両方を載せています。「深みゆく秋」は「深まる」から来た活用です。桂子さん掲句の「秋深む」も「秋が深まってくる」意であること当然で、名物のうどんを食べで秋を深める、のではない。

立冬の朝日来る窓微笑まし

「微笑まし」が面白い。あら捜しをすれば、散文の語序で句が書かれていること、でしょうか。へ微笑まし冬立つ窓に朝日影」とする方法もあります。

中川句寿夫

紅葉寺外数名で拝観す
大箱の燐寸買ひたり茶が咲いて
装うて在所寄り合ふ八つ頭
古書店に先回りせり風邪の神
病院へ逃げ込む心算十二月

装うて在所寄り合ふ八つ頭

以前の、村の寄り合い、みんな背広ネクタイの正装が普通でした。在所のおかみさん方が料理を担当します。無論、材料を持ち寄って。それが里芋なのです。

古書店に先回りせり風邪の神

古書店といい古本屋といえます。辞書辞典類を調べても古書と古本の違いを具体的に説明してくれてあるものがありません。常識的に、あるいは何となく区別している。雑誌小説の類を主に展示している店を古本屋、学術書や稀覯本の出陳を主とする処を古書店。

句寿夫さんは風邪の神の待ちかまえているのは古書店である、とする。天井近くまで棚に並ぶ重厚な書冊の威容は風邪の神も圧倒されそうですが、所詮古本。狙った人を先回りして待ちかまえるに適したところ、と断じたのです。風邪のウィルスは乾燥を好むといえます。古本屋の湿気に対して古書店の乾燥。こんなイメージも句寿夫さんにはあったかも。

病院へ逃げ込む心算十二月

この十二月に入つて句寿夫さん、足腰の弱ること急なのです。頭は実にしつかりしているのですが、数え年九二歳、年齢に勝てぬということでしょうか。誰しものことなのですが、心配しているだけなのがまだるい。

佐藤喜孝

暮れはてし冬田の上の水たまり

金色の人を囲んで冬家族

藁塚の名前を呼ばん山も暮れ

暮れはてし冬田の上の水たまり

さまでなくとも蕭条の冬田に日が落ちた。この辺りで句を収めるのが普通の俳人。喜孝さんはこの上に「水たまり」をもって来た。

金色の人を囲んで冬家族

「金色」は「こんじき」と読むんでしようが、具象としては分らない。しかし作者は具象化しなくてよい、としてこの言葉を選んだに相違ない。一家親族が「金色の人」をとり囲んでのまどぬ。それが誰であつても「冬」であれば「輝くひと」なのです。

藁塚の名前を呼ばん山も暮れ

藁塚に名前を付けること余りあることではありませんが、と言つてあつてもおかしくはない。といいながら喜孝さん、先の句と同様、具体的な名前を想定してのものではないにちがいかい。夕ぐれの藁塚はあれで結構暮れ残るのです。周囲の山々は暮れながら藁塚は暮れ残っている。そんな「にほ」を象徴かるために「名前を呼ばん」との措辞を選んだ。然うに違いない。句作りの上手は一つも二つも読み手に捻りを加えるのです。



あをキーワード俳句辞典 (こもーこや)

隠る

隠り沼の暑き藻豊雷ひびく
 隠り世の生薬屋におく榎植の実
 湧水の水沫に隠る岩魚かな

小諸

ほくほくのじゃがいも絶品小諸産
 小紋

快癒の師装ふ羅藍小紋

炬開や好みの小紋駢取る

風花や中空の青小紋柄

十六夜や染屋に掛かる鮫小紋

暗闇にどんどの火の粉鮫小紋

古文書

古文書のコピーかぐるし閨日過ぐ
 古文書に出自確かむ孟蘭盆会

小屋

紙を漉く小屋に夜昼木の実降る

鶏小屋にはとり一羽春の泥

ヌード小屋夏シャツの衿老紳士

捨て小屋にたつきの跡と夏の草

貧しさを灯す海小屋潤目鱒焼く

犬小屋のかたむき流る秋出水

渡邊 友七
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子

赤座 典子

松本 米子

森山のりこ

長崎 桂子

石森 理和

長崎 桂子

竹内 弘子

芝宮須磨子

田中 藤穂

内藤 悦子

篠田 純子

芝宮須磨子

関口 ゆき

竹内 弘子

山小屋の味噌汁の葱シヤキシヤキと
 終戦日物置小屋へ筵の道
 蛇が棲む農機具小屋の半開き
 学校に蛭小屋あり蝮の宿
 札所寺牛小屋に吊る唐辛子
 犬小屋の跡に木の葉を掃き寄せし
 小屋隅に耳寄せ合つて黒兎
 上目遣ひに物言ひたげな小屋の兎
 春風やしんかんとして孔雀小屋
 走り梅雨半眼の犬小屋の中
 鶏小屋にぶだう這はせて星月夜
 秋霖や小屋の奥より山羊の声
 茱萸熟るる焚物小屋に鶏出入り
 小屋朽ちて道たどたどし山眠る
 煩悶の末山小屋へ夏祓
 内灘や団結小屋に土筆生ふ
 里の柿厩鶏小屋納屋母屋
 猪の小屋の前より登山道
 ホームレスの小屋に小さき鯉幟
 なかまど小屋はしたくを始めけり
 ポンプ小屋鉄扉に施錠輪飾りし
 いい月が出て犬小屋の中の犬

石森 理和
 佐藤 恭子
 鈴木多枝子
 早崎 泰江
 森山のりこ
 竹内 弘子
 田中 藤穂
 赤座 典子
 竹内 弘子
 芝 尚子
 鈴木多枝子
 早崎 泰江
 鈴木多枝子
 長崎 桂子
 東 亜 未
 定梶じよう
 石森 理和
 須賀 敏子
 山莊 慶子
 井上 石動
 定梶じよう
 定梶じよう

俳境流連

遠地にて文旦ふたつみつめあふ 喜孝

四国土産に大きくつやかな文旦を三つ頂いた。
一つを食べあとしばらく食卓の上に置かれてゐた。
食卓と云つても炬燵板の上であるが。

むかし、さう太平洋戦後間もない頃、季節になると父の郷から林檎が送られてきた。林檎と粍殻がぎつしり詰まつた長四角の木箱も物資の乏しい時代にはうれしい贈り物だ。粍殻の中から無限に出てくる美しい紅い果実。葺の凹みに残つた粍殻も懐かしい。

文旦の句を作る時。「りんごのひとりごと」と言う童謡を思った。「わたしはまっかなりんごです。お国は寒い北の国」と歌ひ出し。調べるとわたしよ

り一年早い一九四〇年の歌であった。武内俊子・河村光陽両氏の作られた童謡には「かもめの水兵さん」「グッドバイ」「赤い帽子白い帽子」「うれしいひなまつり」などわたしが何百回も歌つた曲ばかりである。さういへば『青寫眞』のなかに

ヒヨコがね花嫁人形グッドバイの子と初湯

といふ句を作つたことを思ひ出した。



傳句会 席題「柿」

十二月八日 カフェ傳

一箱の蜜柑畳に一気に拈ぐ	理和
冬桜火袋淡く点りをり	敦子
耳病めば人遠くなる枯葉道	藤穂
沈下橋元に戻りて冬麗	敏子
農夫らと焚き火をかこむ白い犬	泉
焼諸の訛懐かしライトバン	佳子
一日目まだまだやさし雪をんな	喜孝
火の用心高層ビルの谷を行く	綾子
太き松くべて炉の火を驚かす	なほ子
アヂササの敗れ葉ごっこい冬木の芽	純子
温泉に入るも入らぬも贅沢白障子	典子
吸殻を探す火鉢や父の影	吉保

あをやぎ句会

十二月二十日 京橋プラザ区民館

マスク掛けスマホ打つ指赤き爪	佳子
冬の月隈くつきりと海鼠堀	敦子
脳細胞健やかであれ枇杷の花	綾子
音もなく雨となりけり竜の玉	由子
傾いた冬日目を刺す急がねば	純子
いらぬもの捨てて寒さの募りけり	藤穂

秋萩句会 休会



